

なぜ白の色鉛筆があるのか

奨励	渡辺 圭一郎〔わたなべ・けいいちろう〕
奨励者紹介	日本キリスト教団香里ヶ丘教会牧師 同志社大学キリスト教文化センター非常勤嘱託職員 同志社大学神学部嘱託講師

イエスが山に登って、これと思う人々を呼び寄せられると、彼らはそばに集まって来た。そこで、十二人を任命し、使徒と名付けられた。彼らを自分のそばに置くため、また、派遣して宣教させ、悪霊を追いつく権能を持たせるためであった。こうして十二人を任命された。シモンにはペトロという名を付けられた。ゼベダイの子ヤコブとヤコブの兄弟ヨハネ、この二人にはボアネルグス、すなわち、「雷の子ら」という名を付けられた。アンデレ、フィリポ、バルトロマイ、マタイ、トマス、アルファイの子ヤコブ、タダイ、熱心党のシモン、それに、イスカリオテのユダ。このユダがイエスを裏切ったのである。

(マルコによる福音書 3章13ー19節)

十人十色

先週文房具屋さんに行ってきました。売られている色鉛筆を見ますと、まず多かったのは12色セットの色鉛筆でした。鉛筆には1ダースという単位があります。1ダースと言えば、12本です。だからでしょうか、色鉛筆も多くは12本セットで売られていました。「赤」「青」「緑」「黄色」それらの鉛筆がきれいに並んでいます。

ところで皆さんは12本の色鉛筆の中で、「何色」をよく使われるでしょうか。描く対象によって「色」は使い分けられるでしょうけれど、真っ白の画用紙があるとして、まず何色を手にとられるでしょうか。「トンボ色鉛筆」を販売している会社が、小学生の保護者に聞いたアンケートによりますと、最初に短くなる色は「赤」が飛びぬけて高く70%、次いで「青」48%、「水色」「黄色」が24%と続きます(重複回答)。

我が家にも色鉛筆(クーピー)があります。見てみますと確かに「赤」や「青」、「緑」はかなり短くなっていました。一方でふと、目に留まりましたのは「白色の色鉛筆」でした。これは買った当初のままと思われるほど、長いままでした。今日の聖書箇所を読んでいたことあるのでしょうか。ふと、「なぜ白色の色鉛筆はあるのか」、「何のために普段使われない白鉛筆があるのか」と思いました。

弟子たちの濃淡

今、聖書箇所を読んでいて、ふと「なぜ白色の色鉛筆はあるのか」、「普段使われない白鉛筆があるのか」と思ったと言いました。そこでまず、今日の聖書箇所に書かれていたことはと言いますと、イエス様が12人の弟子を選ばれた場面でした。さっとイエス様に就き従った人々は多かったと思うのですが、その中からイエス様は12人を選ばれたのです。

12人の弟子の名前のリストを見ますと、ここには、有名な弟子の名前も出てきます。たとえばシモン・ペトロ。この人は最初のイエス様の弟子です。最初の弟子として、シモン・ペトロの言動は、聖書の中でたくさん出てきます。それに続いて12人の弟子の名前のリストには、ゼベダイの子ヤコブ、ヤコブの兄弟ヨハネという名前が挙げられています。ゼベダイの子ヤコブとヨハネは、イエス様が大切な場面でペトロと一緒に同伴される弟子ですので、この二人もよく登場する人物です。また、聖書に親しんでこられた方には、この12人の弟子のリストに名を連ねているトマスや、イスカリオテのユダも印象深い弟子の一人であろうと思います。トマスは、復活のイエスを信じなかったという姿で福音書に登場します。また、イスカリオテのユダは、イエス様を銀貨30枚で裏切ったとして、印象深い人物であろうと思います。

しかし、ふと今回思いましたことは、それ以外の弟子たちはどのような人物だったか、ということでした。たとえば、18節に出てくるアンデレやバルトロマイ、アルファイの子ヤコブ。これらの人物は、はて、どのような人物か。と言いますのも、彼らは聖書の中では、このような12人の弟子のリストにしか名前が出てこないからです。彼らは聖書の中で出番の無かった、果たした役割や功績が記されていない人物なのです。

12色の弟子たち

そこで私は「色鉛筆」の「白色」を、ここで思い描いたというわけです。イエス様は、12人の弟子を選びました。まずこの12人の弟子の集団は、これはカラフルな12色の色鉛筆に似ていると思いました。

ペトロは最も多く登場しますので、色鉛筆で言えば「赤」でしょう。イスカリオテのユダは「青」と言えるかもしれない。徴税人マタイと熱心党のシモンという人は、個性豊かな人生の背景をもっていた点で「緑」や「黄色」に喩えられるかもしれません。その弟子の中にはアンデレやバルトロマイ、アルファイの子ヤコブの名前もある。彼らは聖書の中では、「一見」殆ど役割を果たさなかった、目だった業績を残さなかった人物ですが、そのような人物もイエス様の選ばれた12人の弟子の一人の中にいたのだですね。あまり使わない「白」の鉛筆も、12色の色鉛筆の中に入っている。それと似ている気がしました。けれども色鉛筆には必要があって「白」があるように、きっとここには神様の深い御旨があったに違いないと思ったのです。

シロオビアゲハ

沖縄に「白帯アゲハ」という蝶が生息しています。この白帯アゲハのことで、興味深い話を聞いたことがあります。沖縄には羽に白帯がある、白帯アゲハという蝶がいるのですが、白帯アゲハのメスの中には、時折「赤い斑点」をもつ蝶が生まれるというのです。この「赤い斑点」は生存競争で有利かと言いますと、むしろ不利なのです。白帯アゲハのオスは、この「赤い斑点」をもつメスは好まない。当然のように同じ白い帯をもつメスを好むからです。このため「赤い斑点」をもつ白帯アゲハのメスは、同種内での生存競争では不利なグループです。では、なぜ「赤い斑点」をもつメスが生まれるのか。何のために「赤い斑点」をもつメスが存在するのか。こんな出来事があったそうです。

一時期、天敵の鳥が大繁殖して、白帯アゲハが食い尽くされるという出来事が起こった。しかし、その時、白帯アゲハの中で「赤い斑点」のあるものが生き残った。結果、白帯アゲハ全体が、絶滅を免れたということがあったとのことでした。ではなぜ天敵の鳥は、白帯アゲハの中でこの「赤い斑点」をもつ蝶だけは食べなかったのか。研究によれば、沖縄には「ベニモンアゲハ」という似たような「赤い斑点」のある蝶がいるようです。この「ベニモンアゲハ」は毒をもっている。そのため鳥は、この毒をもつ「ベニモンアゲハ」と勘違いして、「赤い斑点」のある白帯アゲハだけは食べなかったのではないかと言われています。

白帯アゲハの群れの中では、何のために存在するのかと思われるような、不利な要素である「赤い斑点」をもつ白帯アゲハ。しかし実は絶滅の危機という、種全体の最大の危機を、この「赤い斑点」をもつ蝶が支えたのです。一見、無駄と思えるものが、役に立たないと思われる存在が、実は種全体を支えていることがあるのではないかな。そういうことを教えられるエピソードでした。

初期キリスト教会

聖書の話に戻ります。12人の弟子の中に登場するアンデレ、バルトロマイ、アルファイの子ヤコブ、この弟子たちは、名前だけは残っているけれども、聖書の中で殆ど果たした役割・業績を見いだせない弟子たちであったと言いました。何のためにわざわざイエス様は12人の弟子の一人として、彼らを選ばれたのか。聖書に殆ど記されていない以上、後世の者には、その人物の果たした役割は、分らないのです。

しかし、彼らもまた「赤い斑点」をもつ白帯アゲハのように、キリスト教会全体を支える働きを、為したと思います。新約聖書の中には、「使徒言行録」という書物があります。読んで字のごとく、「使徒」(弟子たち)の「言行録」です。この「使徒言行録」には、キリスト教会が当時のユダヤ教や、ローマ帝国からのさまざまな妨害や、迫害を受けながらも、それに耐えつつ、世界に向かってイエス・キリストを宣べ伝えていった事跡が記されています。

その「使徒言行録」の書物の1章に、その当時助んだ弟子たちの名前のリストが挙げられています。そこにはペトロ、ヨハネ、という名に続いてアンデレ、バルトロマイ、アルファイの子ヤコブの名前もはっきりと記されています。ローマ帝国によるキリスト教徒の迫害という「暗闇の時代」を共に歩んで行った弟子の一人ひとりが、彼らだったのです。もしかすると、彼らがいなければ、キリスト教は今日のように伝わっていなかったかもしれません。表だって活躍するペトロは何度か牢屋に入れられたようですがそれでも、そのようなリーダー不在の時も教会は潰れなかった。そこにはこのような無名の、無数のキリスト者による、支えがあったからではないかと思わされました。

なぜ白の色鉛筆があるのか

最後に「白色鉛筆」の役割をお伝えして終わりたいと思います。ここに集われている方の中には、私はこの社会の中で何の役にも立たない「白鉛筆」だと思われている方もいらっしゃるのではないかと思います。また、大勢の人々に囲まれたキャンパスの中でも、いろいろな能力や賜物をもつ人々の中で、私は誰にも必要とされない、必要とされる値打ちの無い「白鉛筆」だと感じていらっしゃる方もいるのではないかと思います。

私自身も時折、白鉛筆みたいだなと思うことがあります。神様の前には、本当にお役に立てない、取るに足らない欠点ばかりの人間だと感じているからです。でも、大切なことは、白色を含め、イエス様は最初からいろいろなカラーの人を集められました。自分が白色だと言って嘆く前に、そんな私でも神様は招いてくださった。用いてくださろうとしていることを喜びたいと思いました。そして先ほども言いましたように、人間の目には一見役に立たないと思われるような「白鉛筆」。そのような存在が教会を、あるいは社会全体を、支えているのではないかと思いますのです。

先日、早速家に帰って、白画用紙を出して、6歳の長男に色鉛筆を渡しました。真っ先に「青」を取り出しました。次に「茶色」でした。お兄ちゃんのやっていることを見た、もう

じき2歳になる次男も、なんや楽しそうなお兄ちゃんはしているということでやって来て、色鉛筆で色を塗りだしました。案の定「白」は見向きもされません。しかし、弟君に邪魔されて癪癪を起こしそうなお兄ちゃんに、これやったら邪魔されへんど、黒の色画用紙を渡しました。すると早速、何色の色鉛筆に持ち替えたか。そう、すぐさま「白」の色鉛筆を取り出したのです。お兄ちゃんから「茶色」の色鉛筆を奪い取った弟君も、黒の画用紙では「茶色」は目立たず色がかけない。今度は弟君が癪癪を起こす番でしたが、私は予想はしていたものの、とても感動しました。

人生も教会も、必ずしも描けるのは「白」のキャンパスとは限らない。順風満帆で、明るく、楽しい「真っ白」の清々しい時代がいつも背景にあるとは限らない。時に、私たちの人生には、苦悩や絶望、悲しみや不安という「黒一色」に染められる場面もある。教会も困難な場面に遭遇することがある。そういう時に、神様は教会に集う一人ひとりを「白鉛筆」として豊かに用いてくださると思うのです。

2015年11月18日 京田辺水曜チャペル・アワー「奨励」記録